

第39回全国児童生徒俳句大会 牧野桂一

おわりに

児童生徒俳句大会の選句を終えるに当たり、俳句大会募集作品の全般的な特徴とともに一万八千を越えるみなさんの俳句作品を選句し、このように選評を書いていく中で気づいたことがいくつかありますので、今年もまた、それらのことについて少しお話ししておきたいと思えます。

児童生徒俳句会に投句する俳句を作るために

毎年全国の多くの児童生徒の皆さんが、この俳句大会のためにたくさん俳句作品を寄せてくれています。そのような人達とともに改めて私たちが作っている俳句について、「俳句とは何か」、「どうすれば読んでくれる人に共感してもらえようかな俳句を作ることができるか」ということを皆さんから寄せられた具体的な作品や先人の残された俳句を参考にしながら、少し突っ込んで考えてみたいと思います。

ここで皆さんと共通理解しておかなければならないこととして、俳句は長い歴史をもつ文学作品であるという特性から、何か一つの正しい答えを出すということはなかなか難しいといわれています。極端なことをいえば、「俳句」については、一人一人の作者に一つ一つの俳句に対する考え方があるということです。

したがって、ここでは、児童生徒俳句大会の優れた作品を読んでいきながら、俳句の特性や特徴について気づかされることを取り上げてまとめ、優れた作品の条件を探っていきながらこれから俳句を作っていく中で生かしていけるように整理してみました。

俳句は詩であるということについて

最初に、共通理解しておきたいことは、俳句は、今では日本だけではなく世界中に注目されるようになった世界で一番短い詩であるということですが。世界中の人たちが俳句を作るようになっていきます。そこで共通になるキーワードが「世界一短い詩」ということです。

俳句は、「五七五」の音が基本になりますので、「十七音」ということになります。簡単にいえば「十七音詩」ということで、児童生徒俳句会の初代の選者であった角川春樹先生は、「魂の一行詩」

というように表現されています。

この短さをこれまで発表されてきたよく知られている俳句作品の中で確認すると、十七音に届かない「咳をしても一人 尾崎放哉」や「動けば寒い 橋本夢道」「シヤツ雑草にぶつかけておく 栗林一石路」という短いものから、十七音を超えた「太陽のしたにこれは淋しき薊が一本 荻原井泉水」や「おちついて死ねさうな草萌ゆる六十にして落ちつけないこころ海をわたる 種田山頭火」というような長いものまであります。つまりこの短さは、わかりやすくいえば「一息でいえるくらい長さ」ということになるのではないかと思います。これまでの俳句大会の募集作品の中には、十七音より短いものや長いものもたくさんありましたが、残念ながら優れた作品として入選したものは、ほとんどが、基本的には十七音を中心に表現した作品でした。

また、「詩」ということでいえば、「詩は心に感じたことを一定のリズムと形式にあてはめて、言葉で表したものです」ですので、日常で私たちが使う文章のような散文とは違うということになります。そして、俳句を含めた詩というものは、言葉の表面的な意味だけではなく、美しい言葉で、呼びかけて、注意や自覚、良心などを表現する文学の一つの形式になっています。そして、一定のリズムを持つ韻文で効果的に感動、叙情、心の動き、ビジョンなどを表すための表現上の工夫がなされているものなのです。簡単に言えば俳句は感動を表現する詩なのです。したがって、これまでの俳句大会においては、今回の俳句大会と同じように基本的には、散文的な傾向の強い表現になっているものは、入選作品から外れています。

俳句の作品が「詩」であることの最も大切な条件が、気持ちやものの説明をしたり解説をしたり、言い訳をしたりするのではなく、その作品には、今まで知られていなかったことを初めて見いだしたその作者にしかない発見や驚き、悲しみや喜びなど深く心を動かされるような「感動」があるということが最も大切な要素になります。読む人は、作った人の感動に共感することによって、自然や人間などの生きとし生けるものとかいろいろな人の体験や人生について深く考え、味わうことができるのです。

今回、皆さんの作品を選句していく中でも、日

記や作文の中に出てくる説明文のような作品もいくつかありましたが、それらは、読む人が「ああそうですか」と受け取ってしまうだけで、作った人の感動が伝わってきませんでしたので、入選作品からは外しました。俳句の世界では、そのような俳句を「ああそうですか俳句」といって、俳句会などでも選には入りません。芭蕉もそのような散文化的な俳句に対して『去来抄』という書物の中で「いひおほせて何かある」つまり「説明しつくしたとしてもそれがなんになる」というようにいっています。

ここで、「いい過ぎ」や「説明的」ということについて、インターネットの中で紹介されていた記事がありましたので、それを基に紹介してみたいと思います。ここで取り上げられていたのは「コスモスや」の句で、「コスモスや風に揺れたるころもち」というようなものでした。同じような句が、今回もたくさんあり、よく見かける説明的な句の特徴を表しています。この句をよく読んでみますと、一見いい句のように見えるかもしれませんが、「風に揺れる」というのは「コスモス」という言葉の中にすでに含まれているイメージなのです。つまり「いわずもがな」のことなのです。コスモスといえば、「風に揺れる」「ピンク」「やさしい」「はかない」ということは、誰でもが思い浮かべる一般的なことです。つまり、「風に揺れたる」というのはコスモスの一般的な説明に過ぎないわけで、わざわざ短い十七音の中で言わなくてもいいことなのです。従って、そのようなコスモスのもつイメージは、コスモスに任せてしまいい、作者は深入りして説明しないで省略するということです。俳句をつくるときには大切になるのです。

このような例として昔から「板敷きに下女取り落とす海鼠かな」が取り上げられてきました。最初の省略は、「板敷きに落としたる海鼠かな」です。それを「取り落とし取り落としたる海鼠かな」と推敲するというのです。そういう意味で言えば俳句はものを余りいわない省略の文学と言うことができると思います。

季語について

次に、俳句は十七音という短い表現になっていますので、感動を伝えるためには、どうしても一句の中には、普通の言葉とは次元の違う印象的

象徴的な言葉が求められます。俳句では、その言葉を季語として一句の中に取り入れて、詩情を高めてきましたので、特別な場合は別として、季語が入っている有季というのが俳句作るときの伝統になっています。この季語も時代の流れとともに変わってきていますので、季語に対する考え方も様々であって、「しんしんと肺碧きまで海のたび篠原鳳作」というような季語のない無季の俳句を作る人もいますが、その場合でも、一句の中には、季語に変わる詩的な象徴的な言葉が「詩語」として位置づいています。身の回りにある歳時記をひもといてみますと、現代俳句協会が中心になって編纂した歳時記には、季語のない無季の俳句もたくさん取り上げられていました。今回の俳句大会の選に当たっては、無季で特に優れたものは見つけることができませんでしたので、入選作品としては取り上げておりません。

また、「冷水をそつと供える原爆忌」や「菜の花が月に明かりをつけました」の中でも説明したのですが、季語と季語の重なる「季重なり」というこということも俳句では問題になることがあります。この「季重なり」については、芭蕉や高浜虚子、水原秋桜子などの句の中にもたくさんありますし、歳時記の中にも「季重なり」の俳句は沢山見かけますので、季語が重なっているということだけでは、一概に俳句として否定することは出来ません。しかし、十七音という短い一句の中で季語のように中心になる強い言葉が二つ三つと重なると俳句の中心が割れてしまい、まとまりがなくなり美的ではなくなりますので、中心を一つに絞るということが求められます（これについても河東碧梧桐たちの無中心俳句という運動もありましたので一概には言えませんが・・・）。したがって「季重なり」になっても一つの季語が強くて主になり、もう一つの季語が副になって支えているような場合は俳句として立派に成り立ちます。また、私がよく「季重なり」の俳句の例として出す山口素堂の「目には青葉山ほととぎす初鰹」という有名な句などは、三つも季語が重なっています。視覚としての「目には青葉」、聴覚としての「山ほととぎす」、味覚としての「初鰹」というように感覚で統一されていますので、「季重なり」が逆に有効に生かされているのです。

「切れ字」について

もう一つ「行く秋やあと五か月のランドセル」や「インペリアトポーズの瞳の子猫かな」などの句の選評でも触れたのですが「切れ字」という問題があります。俳句では、「切れ」が大切であり、「や、かな、けり」の切れ字が、特に大切だと言われています。先日、俳句を扱うテレビ放送を見てみるとこの切れ字として「よ」という言葉を使う指導がしきりに行われていましたが、この「よ」も切れ字の働きをします。私も俳句においては「切れ」は大切であり、「切れ」があると俳句が引き締まり余韻が出てくると思っています。この「切れ」は、一般の文章には見られない俳句独特の考え方ですので、「切れ」ということをきちんとして理解することができるようになるには、少し経験が必要になり時間もかかると思います。そこで、ここで、改めて俳句における「切れ」について基本的なことを考えてみたいと思います。

これまでも考えてきましたように、俳句の「切れ」というのは、文字通り内容を切り分けたり、余韻を持たせたりする働きがあります。俳句は最短詩ですから、十七音を途中で切って内容を分け、余韻を持たせることで、詩的な世界に膨らみを生み出すのです。また、十七音を途中で切ることによって、その直前の言葉を強調したり、アクセントをつけたり、感動したポイントを詠嘆したりして読む人に分かり易く伝えてくれます。読む人が「や、かな、けり」で詠嘆されるとなんとなく俳句らしく感じるのもそのような働きがあるからです。

例えば、「目の前に真つ赤な花が咲いている。空は雲ひとつなく晴れ渡っている。」と書かれたら、眼前に真つ赤な花が残されたまま、雲ひとつなく晴れわたった空に映像が映っていき直前の花の色が強調され、臉に残ります。この例文のような働きが俳句の「切れ」にはあるのです。また、もう一つ、一句の中の「切れ」は一つだけという暗黙の了解があります。一つの俳句に二つの切れが入ってしまうと、その俳句は「三段切れ」と呼ばれ、俳句における「切れ」の効果を失ってしまい、逆に一句がばらばらになり、単語の羅列のようになってしまいます。

もちろんこのことも俳句のきまりとして「絶対ダメだ」ということはありませんが、「切れ字」

を使って俳句をぶつぶつ切ってしまうと美的な世界が壊されて粗雑になり、短い俳句がばらばらになって、まとまりがなく味わいが浅くなるのでできるだけ避けるようにしています。ここで、「俳句の切れ」の働きをまとめてみると、「余韻をもたせて表現を大きくする」「感動のポイントを分かり易くする」ということがあります。

ちなみに、今回の選の中には「や」「かな」「けり」が二つ重なっている作品には、特別取り上げるような作品は見当たりませんでしたので、選の中には入っていません。

俳句の構成について

五七五の十七音がどのような組み立てになっているか、つまり俳句の基本的な構成というところを考えるととても重要になりますので、少し考えてみたいと思います。

俳句では、「五七五」の作品を一つのまとまりとして述べる方法を「一句一章」といいます。その例としては、高浜虚子の「流れゆく大根の葉の早さかな」「白牡丹というといえども紅ほのか」「金亀虫擲つ闇の深さかな」や水原秋桜子の「滝落ちて群青世界とどろけり」「来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり」などの句があります。つまり「全体が季語に関係すること」でまとまっているということです。

また、五七五が句の中で切れているのを「二句一章」というのですが、その例としては、同じ高浜虚子に「春風や鬨志抱きて丘に立つ」「牛の大きな顔や草の花」などがあり、水原秋桜子には「冬菊やまとふはおのがひかりのみ」「ふるさとの沼のにほひや蛇苺」などの句があります。つまり『季語』+『季語に関係の無いこと』や『季語に関係の無いこと』+『季語』ということがあります。したがって俳句を鑑賞するに当たっては、私たちは知らず知らずのうちに胸に伝わってくる感動がどのような構造になっているかを自然に感じているようです。俳句を作ったり推敲したりするときはこのことを頭に入れておくと俳句の世界が広がってくると思います。

インターネットを覗いてみると、同じようなことが紹介されており、ここでは、コスモスの例が取り上げられて紹介されていました。

「コスモス」は四音になりますので、上の五音にするために何か一音足す必要があります。つま

り「コスモスの」「コスモスを」「コスモスに」
などと考えていくのですが、それらを少し紹介し
ます。

コスモスとしか言ひやうのなき色も 後藤比奈夫
コスモスが咲けば地表のうるほへり 細見綾子
コスモスはどこにありても風少し 細見綾子
コスモスの散りしきるとき醜しづのわれ 三橋鷹女
コスモスがすがれる蝶も露しとど 水原秋桜子
コスモスに風ある日かな咲き殖ゆる 杉田久女

ここでは俳句らしく「や」をつけることが多いの
で「コスモスや」としています。「や」は切れ字
の働きをして強い詠嘆を表しますので、「美しい
なあもうこんなにたくさんコスモスが咲いている
よ」とか「わあ、可愛らしい。こんな所にコスモ
スが咲いているよ」というように状況を表現して
くれます。それらの作品をまた少し紹介します。

コスモスやかるき思ひの日当れる 鷺谷七菜子
コスモスやふるき碓氷の峠口 水原秋桜子
コスモスや二戸相倚れるこけら茸 阿波野青畝
コスモスや倒れぬはなき花盛り 松本たかし
コスモスや光かがやく墓ばかり 村山故郷
コスモスや墓銘に彫りし愛の文字 富安風生
コスモスや夜目にもしるき白ばかり 日野草城
コスモスや旅路は同じ帰路をとる 稲畑汀子
コスモスや標高千の町に着く 村田近子
コスモスや髪ふさふさと少女ゆく 田口泡水

インターネットの中の紹介では、
コスモスやもうすぐ妻の誕生日
という句が紹介されていたようです。

類句、類想句、模倣句について

一方、今回の選句においても入選として採用し
なかつたものに、類句、類想句、模倣句という問
題があります。俳句は十七音しかない短い表現で
すので、似たような俳句や全く同じ俳句が生まれ
やすい傾向があります。そのため、様々な俳句大
会などにおいても過去に他の大会で入賞した句
が、別の俳句大会で受賞したりして問題になるこ
ともありますが、そのような場合には「受賞を取
り消す」ということになっているようです。本児
童生徒俳句大会の選句に当たっても、基本的には
類句、類想句の俳句は「入賞句からは外す」よう

にしています。類句、類想句、模倣句を調べるた
めに、今回も連携している各種俳句大会の事務局
に、第三十九回の特選以上の入賞候補作品を送り、
詳しく吟味していただきました。そして、そこで
類句、類想句、模倣句として取り上げられたもの
で、類想性や模倣性が強く感じられる作品につい
ては、入賞や特選から外しました。

このような類想句や模倣句については、十七音
という短さを特徴とする俳句の持つ宿命のような
もので、似たような俳句や全く同じ俳句が生まれ
るのは常といつていいくらいです。そのため、大
きな俳句大会などにおいても過去に他の大会で入
賞した句が、別の俳句大会で受賞したりして問題
になることもあります。そのような場合には「受
賞を取り消す」ということになっているようです。
しかし、俳句を作るときに、類句、類想句を恐れ
て、俳句をのびのび作ることが出来なくなつてし
まっても困りますので、「自分から進んで意識的
に真似をする」ことは避けるとしても、結果とし
て類句、類想句になることは、必要以上に気にし
ないで良いのではないかと思います。有名な芭蕉
も「自分の句が他人の句に似てしまうより、実は
自分が似たような句ばかり作っていることに気付
かないものです。これを避けるには、深く考えて、
味わいながら句をつくることです。もし、類句を
作ってしまったら迷わず自分の句を捨てなさい」
と言っています。そして、芭蕉自身も「須磨は暮
れ明石の方はあかあかと日はつれなくも秋風ぞふ
く」という歌と関わって「あかあかと日はつれな
くも秋の風 芭蕉」という俳句を作っています。
別の例に「降る雪や明治は遠くなりけり 中村
草田男」という句に先駆けて「獺祭忌明治は遠く
なりにけり 志賀芥子」という俳句がすでにあっ
たということなど有名な話もあります。

他にも「良寛と一茶」に「焚くほどは風がもて
くる落ち葉かな 良寛」と「焚くほどは風がくれ
たる落ち葉かな 一茶」や「池西言水と山口誓子」
に「風の果はありけり海の音 言水」と「海に
出て木枯帰るところなし 誓子」、「川端茅舎と
多賀よし子」に「一枚の餅の如くに雪残る 茅舎」
と「一枚の餅の如くに乱れたく よし子」、「森
澄夫と鈴木真砂女」に「蠶めなみ（めなみ）や旅につ
かれしふくらはぎ 澄雄」と「初蛙旅の疲れのふ
くらはぎ 真砂女」、「森澄雄と日美清史」に「か

たかごの花や越後にひとり客 澄雄」と「かたくりの花や常陸にひとり客 清史」、「權未知子と奥山まや」に「いきいきと死んでゐるなり水中花 未知子」と「いきいきと死んでゐるなり甲虫 まや」など上げていけば枚挙にいとまがありません。

今回は特に作品としては、入賞のレベルであるにもかかわらず、類句や類想句があるために入賞から外した作品もいくつかありました。

俳句における分かり易さ

今回もこのように、選評を書かせてもらおう中で、俳句における分かり易さということ度を考えさせられましたので、この機会に少し突っ込んで考えてみたいと思います。俳句はやはり文学・文芸ですから、人に伝えるという大切な機能があります。このことから考えると分かり易いということは、とても大切な要素ですが、分かり易いだけでは人を感動させるような作品にはならないという問題もあります。芭蕉以来の多くの人々の優れた作品を読んでみますと分かり易い俳句もあります。が、難しい俳句もあります。読み手としては、分かり易い俳句に親しみを感ずますが、だからといって俳句は分かり易い俳句がいい俳句だと決めつけることは、少し早合点のような気がします。一見難しいと思われるような句も、難しい言葉を辞書で引いて確かめたり、分からない所を人に聞いたりしながら、ゆっくり、じっくり読んでいくとその句の良さや魅力に出会うことができることがあります。実はそこに俳句のもう一つの価値があるのです。そのように考えると俳句は作ることを鑑賞することが同時に成り立つ、両立することが大切なのです。芭蕉は、「自分は句を作ることは

一番ではないかも知れないが、俳句をさばく（選句をして鑑賞する）ことでは人に負けない」といっています。

皆さんも、このように自分で俳句を作るとともに、この機会に是非人の作品を読んで味わう楽しさを学んでもらいたいと思います。

俳句の指導

最後に、俳句の学び方について、野見山朱鳥がある著書の中で面白いことを教えてくれていますので紹介したいと思います。俳句雑誌「ホトトギス」の黄金時代を作ったといわれる俳人に、村上鬼城という人がいました。その鬼城は句会の指導で、選に漏れた作品を取り上げ、その欠点について詳細に解説したそうですが、その指導の仕方が的確で、みんなを納得させるものであったため教えを乞う人が沢山出てきたといえます。一方、俳句雑誌「ホトトギス」の主宰者である高浜虚子の場合は、入選した作品の良いところを指摘して誉められるだけであったといえます。この二人の指導の結果として高浜虚子の弟子からは、次々と俳壇をリードしていくような優秀な俳人が出てきました。が、村上鬼城の門からは、名のある俳人はあまり生まれなかったといえます。人は、欠点や弱点は案外自覚しているのですが、長所は本人にはなかなか見えていないということでしょうか。これからも児童生徒に俳句の指導を行ったり、みなさんが中心になって句会をしたりして、俳句を人に教える機会がある時には、このことも俳句の一つの特性であるということ覚えておいていただけたら参考になるのではないかと思います。